

アウグステイヌスの聖書解釈

——『詩編注解』第六九—七四編を中心に——

水 落 健 治

この度、筆者は『アウグステイヌス著作集 19 II 詩編注解 (4)』教文館の翻訳者のひとりとして、『詩編注解』*Emendationes in Psalmi* 第六九編から七四編までの翻訳を担当した。その作業の中で、「アウグステイヌスの詩編解釈の特徴」とでもいうべきものが見えて来たので、以下、それらの諸点について報告させていただこうと思う。¹

1 表題へのこだわり

アウグステイヌスの詩編解釈においてまず気がつくのは、「表題」の解釈である。しばしば詩編は、様々な表題

をもって始まるが、アウグステイヌスはこの表題を重視し、時にはこれについてきわめて長い考察を展開する。以下、三編について表題の解釈を見てゆく。

1・1 詩編第七〇編の表題

詩編第七〇編は、「ヨナダブの子のひとり、最初に捕囚の者となった者たちのひとり、ダビデの歌」という語で始まっている。そこでアウグステイヌスは「ヨナダブの子ら」について述べられているエレ三五・六一〇を参照し、ヨナダブの子らとは「父ヨナダブから『酒を飲むな。天幕に住め』と命じられたとき、それを神からの命令として受

け取った人々」、つまり「神に自発的に使える人々」と理解する。

そして次の「最初に捕囚の者となった者たち」という語を、「ヨナダブの子ら」の言い換えではなく、「それと対比されている別の人々のこと」と解し、「『最初の人間（アダム）』において『罪人（捕囚）』となった人々のこと」と理解する。

その上で、この詩編の作者であるダビデがこれらの二種類の人々「のひとり」とされていることに注目し、「この詩編は、（一）神に自発的に仕えながらも（二）なお罪人である、という二面性をもつダビデによって書かれた」と捉え、詩編本文の解釈の方向性をこの点に求める。

1・2 詩編第七一篇の表題

詩編第七一篇の表題は「詩編。ソロモンに」Psalmus. In Solomonem となっている。アウグステイヌスはこの表題について

だがこの詩編の中で語られるのは、肉体的な意味におけるイスラエルの王ソロモン、聖書が語る限りでの

ソロモンには適合せず、主キリストにもっとも相応しく適合するものである。したがって、「ソロモン」という語それ自体は比喩的な意味で採用されており、この語のうちにはキリストを見るべきであるということが分かる。ソロモンは「平和を作り出す者」と解釈され、したがってこの語はキリストにもっとも真実に、よい仕方でも適合するからである。²⁾

と述べる。

つまりアウグステイヌスは詩編七一編の内容と旧約聖書の歴史書に記されてソロモンの生涯とを比較し、両者が一致しないことを指摘し、そこから、この詩編の表題「ソロモン」を比喩的な意味に解釈すべきとの結論を引き出すのである。

1・3 詩篇第七三篇の表題

詩編第七三編の表題は、「アサフの理解」intellectus Asaph となっている。アウグステイヌスは「アサフ」について「アサフとはラテン語で会衆の意味で、ギリシア語で会堂（シユナゴグ）の意味で言われる³⁾」と述べ、この表

題を手掛かりにこの詩編の内容を

旧約の民(Ⅱ会堂)が神の新しい契約を理_レ解_レし、「残りの民」(ロマ九・二七、イザ一〇・二二)、「真の神の民」となつてゆく過程

として捉える。

以上、第七〇、七一、七三編の表題の解釈から分かるのは、「アウグスティヌスは詩編の表題を考察することによつて、それ以降の詩編本文の〈解釈の方向性〉を見定めている」ということである。そしてアウグスティヌス自身、詩編七〇編の表題の解釈に際して、「表題は、……家中で何が行われるのかを戸口において示している」と述べて、自らが自覚的にこのような仕方¹⁾で表題解釈を行なつてゐることを語つてゐる。

2 テキストの観察・精査

アウグスティヌスは修辞学者であつたと同時に文法学

者でもあつた。⁵⁾そして当時の文法学 grammatica は、読み書きを教える初等部門 Iteratio と現代の文献学に相当する部門 *litteratura* とに分かれていた。⁶⁾ アウグスティヌスは、詩編の解釈においても文献学の方法を用い、テキストの精緻な観察に基づいて解釈を導き出して行く。以下、詩編第七一編一―五節の解釈を実例にアウグスティヌスの文献学的解釈方法を見てゆくが、まずこの箇所⁷⁾の和訳を示す。

1 詩篇。ソロモンに。

2 神よ、あなたの裁きを王に、あなたの正義を王の子に与えてください。

あなたの民を正義において、あなたの貧しき人々を法廷において裁くこと。

3 山々が民のために平和を受け取り、丘が正義を受け取りますように。

4 彼は民の中の貧しい者たちを裁き、貧しい者たちの子を救うでしょう。

5 彼は太陽まで「と共に」留まるでしょう。そして月の前にも世々の世の前にも。

2・1 「繰り返し」に着目すること

詩編七一・一の表題をアウグスティヌスがいかに解釈するかについては前節で見たが、これに続く二節前半はこうなっている。

神よ、あなたの裁きを王に、あなたの正義を王の子に与えてください。

Deus, iudicium tuum regi da, et iustitiam tuam filio regis.

アウグスティヌスはこのテキストを観察しこう述べる。

だがここでは、聖書の慣例にならって同一のことが繰り返されていく。つまり「あなたの裁きを」という語と「あなたの正義を」という語が述べられ、同様な仕方「王に」という語と「王の子に」という語が述べられているからである。

そして詩編に現れる同様の繰り返しの实例を掲げた後、

詩編二・四「天に棲みたもう方は彼らを笑いたもうだ

ろう。主は彼らを嘲りたもうだろう」

詩編一八・二「天は神の栄光を語り、大空は神の手の業を伝える」

こう語る。

このような繰り返しは、神の言葉を強調することになる。ある場合には同一の語が繰り返され、別の場合には同一の意味が別の語で繰り返される。そしてこのような表現は特に詩編に多く見出される。魂の感情を揺り動かそうとする表現法に多く見出されるのである。

2・2 語順に着目すること

今その前半を見た七一編第二節は、ふたつの文から成り立っている。

神よ、あなたの裁きを王に、あなたの正義を王の子に与えてください。

あなたの民を正義において、あなたの貧しき人々を法廷「裁き」において裁くこと

2・4 写本の信頼性を考慮して解釈を行なうこと
続く第三節のテキストは、

山々が民のために平和を受け取り、丘が正義を受け取りますように

Suscipiant montes pacem populo, et colles iustitiam.

となつている。アウグステイヌスは、この箇所を解釈するに際して複数の写本を参照し、こう述べる。

だが他の写本では「山々が民のために平和を受け取り、丘もまた」となつている。だがこれらの写本には「彼は民のうちの貧しいものを正義において裁くだろう」という語が続いている。だが私は、私たちが先に提示した一文、「山々が民のために平和を受け取り、丘が正義を受け取りますように」という一文を含む写本の方が一層信頼できると思う。とはいえ、それらの写本の内でもある写本は「あなたの民のために」となつているのに対して、他の写本は「あなたの」を欠いており、ただ「民のために」となつているのだが。

一般に、アウグステイヌスが用いたラテン語旧約聖書本文は七十人訳聖書に基づく *Itala* と呼ばれるものであったと言われている。しかしこの言葉を見ると、アウグステイヌスが詩編解釈に際してかなり多くの写本を参照し、それらの信頼性を考慮しつつ解釈を行なっていたことが分かる。

2・5 ギリシア語七十人訳原文の解釈史を参照して解釈を決定すること

第五節前半は次のようになっている。

彼は太陽まで「と共に」留まるでしょう。

Et permanebit soli [cum sole]

LXX kai ouptagauevei tō hēliō

アウグステイヌスはこのテキストの解釈として「彼は太陽まで留まるでしょう」と「彼は太陽と共に留まるでしょう」の二つを示し、こう語る。

我々「ラテン語を話す者」のうちの幾人かは、後者

Deus, iudicium tuum regi da, et iustitiam tuam filio regis,
Iudicare populum tuum in iustitia, et pauperes tuos in
iudicio;

このテキストを観察すると、「裁き」iudiciumと「正義」iustitiaの語順が、前半と後半とで逆になっていることが分かる。アウグステイヌスはこの語順から、iudiciumとiustitiaとが同一のことを意味していると理解してその後の解釈を展開する。

2・3 文法的に不明な箇所を他の聖書の箇所から解釈する
すゝむ

さらにまた、この箇所の二行目は、直訳すると

あなたの民を正義において、あなたの貧しき人々を法
廷において裁くこと

iudicare populum tuum in iustitia, et pauperes tuos in
iudicio.

LXX κρινεῖν τὸν λαόν σου ἐν δικαιοσύνῃ καὶ τοὺς
πτωχοὺς σου ἐν κρίσει.

となっていて、七十人訳本文もアウグステイヌスが用いたラテン語訳も「独立不定詞句」となっている。アウグステイヌスはこの独立不定詞の意味を確定するために、聖書中の同様の表現を探求し、箴言冒頭に同様の独立不定詞句があることを突き止める。

ダビデの子、ソロモンの箴言。知恵と訓練を知ること
Proverbia Salomonis, filii David, scire sapientiam et
disciplinam

LXX Παροιμίαι Σαλωμωνῶντος υἱοῦ Δαυὶδ... γινῶναι
σοφίαν καὶ παιδείαν

そして、この独立不定詞句が目的の意味で使われていることを手掛かりに、詩編七一・二の不定詞句をも目的の意味に解する。

あなたの民を正義において、あなたの貧しき人々を法
廷において裁くために。

の読みの方がギリシア語の *συνταραχμεναι* のよい解釈であると考えた。だがこの語をラテン語の一語で訳そうとすると *compernebit* となり、したがってこれをラテン語一語で表現することはできない。だが、その意味を表現しようとするなら「彼は太陽と共に留まるでしょう」ということになる。なぜなら、*compernebit soli* というラテン語は「太陽と共に留まるでしょう」という意味以外にあり得ないからである。⁽¹⁰⁾

ここでアウグステイヌスが語っていることは、次のように要約される。

- ・この箇所 of the七十人訳ギリシア語本文は *καὶ συνταραχμεναι τῷ ἥλιῳ* となっている。
- ・この箇所の動詞 *συνταραχμεναι* は *συν* (共に) および *ταραχ* (傍らに) と *αχ* (二つの接頭辞に *μεναι* (留まるだろう) を付加した合成語であり、*τῷ ἥλιῳ* は *οὐρανός* (太陽) の与格(間接目的格)であるが、意味が不明である。

・これをラテン語に直訳すると、*συν* に相当する接頭辞 *con*、*ταραχ* に相当する *per* をつけて *compernebit soli* となるが、このラテン語も意味不明である。

・そこで、この箇所の意味を理解しようと試みた人々は、*con* (共に) という接頭辞を同じ意味の *cum* (と共に) という前置詞に読み替えて *pernebit cum sole* (彼は太陽と共に留まるだろう) と理解しようとした。⁽¹¹⁾

・私は、この解釈の方がよいと思う。

この箇所から分かるのは、「アウグステイヌスは詩編の解釈に際して、恐らく常に七十人訳ギリシア語旧約聖書の本文を参照していた」ということである。そして彼はその上でラテン語諸訳を参照し、自ら最善と思う読みを採用している。

2・6 複数の読みが可能な箇所では、複数の解釈の可能性を認めた上で最適の解釈を決定すること

第五節後半は次のようになっている。

そして月の前にも。世々の世の前にも

Et ante lunam, generationes [generationis] generationum.

LXX kai πρὸ τῆς σελήνης γενεάς γενεῶν

アウグスティヌスは、この箇所の解釈についてこう述べる。

この箇所のギリシア語 γενεάς γενεῶν を少なからぬ人々は「世」 generationes という意味にはなく「世々の世の」[なごし、世の世々の] generationis generationum という意味に解釈したがこれも正当である。なぜなら、ギリシア語 γενεάς の格は曖昧であつて、単数属格 τῆς γενεᾶς つまり「世の」なのか、複数対格 τὰς γενεάς つまり「世々を」なのかが明瞭な形で現れてはいないからである。それにもかかわらず先の解釈を述べたのは、詩編記者は「月」という語を述べた理由を説明しようとして「世々の世」という語を付加したのだ、という解釈がどちらかという指望ましい解釈であるからにはかならない。¹²

ここでアウグスティヌスが語っていることは次のことである。

・七十人訳本文の γενεάς の格は曖昧であり、単数属格 τῆς γενεᾶς つまり「世の」とも、複数対格 τὰς γενεάς つまり「世々を」とも解釈可能である。
・多くのラテン語翻訳者は γενεάς を複数対格と理解した。そうするとこの語のラテン語訳は generationes となり、この語は ante という前置詞にかかることになり、その意味は「月の前にも、世々の世の前にも」となる。

・他方、この γενεάς を単数属格と捉えるラテン語翻訳者もいる。そうするとこの箇所のラテン語訳は generationis generationum となり、この箇所の意味は「世々の世の月の前に」となる。

・文法的には、これら二つのいずれも可能であるが、私（アウグスティヌス）は前者の方が望ましいと思う。

・なぜなら、詩編記者は「月」という語を述べた理由を説明しようとして「世々の世」という語を付加し

たのだ、という解釈の方が望ましい解釈であるからだ。

アウグステイヌスはここでも七十人訳聖書のギリシア語本文を参照している。そしてギリシア語本文の曖昧さに由来する二種類の解釈の可能性を認め、その上で、ここで語られる「内容」を根拠に第一の解釈を採用している。

2・7 アウグステイヌス聖書解釈の文献学的性格

以上われわれは、アウグステイヌスの詩編七一編冒頭の解釈を見ることによって、アウグステイヌスの聖書解釈が「テキストの精査・観察」に基づいていることを見て来た。ここまで見てきた

- ・七十人訳ギリシア語本文の参照
- ・ギリシア語、ラテン語の文法に基づいた解釈
- ・繰り返し返しへの注目、語順への注目
- ・写本の信頼性を考慮する

といった方法は、アウグステイヌスの聖書解釈の方法がき

わめて「文献学的」であることを示している。

これまで、アウグステイヌスの聖書解釈については、彼が「アンブロシウスの比喩的・霊的聖書解釈 (aenigmatice... spiritaliter)」を聴いて「マニ教の誤謬から解放された」という記述(「告白」五・一四・二四)等を典拠として「アウグステイヌスの聖書解釈は比喩的解釈である」と理解されることが多かった。だが上記の考察からすると、彼の聖書解釈を「比喩的」と呼ぶことはもはやできないであろう。⁽¹³⁾

彼の聖書解釈は、現代の文献学者がテキストを扱う方法にも通じるものがあり、きわめて実証的・合理的なものと言うことができる。

3 予型的・救済史的解釈

以上の性格に加えて特徴的なのは、アウグステイヌスが旧約聖書およびその中の詩編を「新約の予型」として、「救済史の枠組みの中で」解釈しているということである。詩編七二編は、

エッサイの子ダビデの讃歌は終わった。アサフのため

Defecerunt hymni David, filii Iesse: Psalmus ipsi Asaph.

という表題をもつて始まるが、アウグステイヌスはこの部分
を解釈して次のように述べる。¹⁴

この詩編を歌うのは誰の声なのだろうか。アサフの声である。では「アサフ」とは何だろうか。ヘブライ語をギリシア語に訳した人々、ギリシア語を私たちのためにラテン語に訳した人々の翻訳から分かるように、「アサフ」は会堂（シユナゴグ）と訳されている。つまりこの詩編を歌う声は「会堂の声」なのである。……そこでこれらの出来事が私たちに対する予型 figura であることを簡単に見てほしい。

イスラエルの民はファラオとエジプト人の支配下にあった。キリストの民は信仰に至る前、神からの断罪を受け、悪霊と彼らの頭である悪魔とになお仕えていた。エジプト人の軛くみに繋がれていた民はおのれの罪に仕えていた。悪魔が支配力を発揮するのは私たちの罪を媒介として以外にないからである。

イスラエルの民はモーセによってエジプト人から解放された。キリストの民はわれらの主イエス・キリストによつて罪の生から解放された。イスラエルの民は紅海を通つて、キリストの民は洗礼を通して解放された。イスラエルの民の敵は紅海でことごとく死に、われらの罪は洗礼においてことごとく死んだ。だが兄弟たち、注目してほしい。紅海を渡つたのち直ちに、イスラエルの民に故国が与えられたのではなかった。また彼らは、敵どもが消えてしまったかのように易々と勝利を得たでもなかった。砂漠の孤独と立ち塞がる敵たちが待ち構えていた。そしてこれと同様にキリストの民の生も洗礼の後になお様々な試みが待ち構えている。イスラエルの民は、かの砂漠で約束の国を望んでため息をついた。キリストの民も、すでに洗礼によつて浄められているとはいえ約束の国を望んでため息をつくことしかできない。彼らはすでにキリストと共に統治しているのか。キリストの民はいまだわれらに約束された地に到達してはいない。だがその地が終わることはない。なぜならダビデの讃歌はその地で終わることはないだろうからだ。

すべて信仰を有する者たちはこのことに耳を傾けなければならぬ。……

かくして、かの会堂（「アサフ」）が心を向けていたのは神から受けたものであった。神がイスラエルの民に約束されたものであった。地上の事物の豊かさ、故国、平和、地上の幸福であった。

だが、これら一切のことがらは予型だったのだ。会堂は、これら予型的な事物の中に何が隠されているかを理解せず、これらを神からの大いなる贈り物と考え、ご自身を愛し礼拝する者に与えられるであろうさらに優れたもののことを考えなかつた。

会堂は心を向けた。そして見たのは、罪人や不敬虔な人々、神を汚す人々、悪霊に仕える人々、悪魔の子たち、大きな不義と傲慢の中に生きる人々であった。会堂はこのような人々が地上の事物、時間的事物で豊かになっているのを見た。会堂はこれらの事物を見る眼で神に仕えていた。かくして、会堂の心に悪しき思いが生まれた。そしてその思いによって足を滑らせ、神の道から落ちそうになったのである。

古い契約「旧約聖書」の民の中に起こったのはこのよ

うな思いであった。だが今や、新しい契約「新約聖書」の伝える幸福が明らかなる形で宣べ伝えられている。どうかこの時に生きる肉体的な兄弟たちの内にそのような思いが起らないように。ではあの時に会堂が語ったのは何だったのか。イスラエルの民が語ったのは何だったのか。

「私たちは神に仕えています。なのに滅ぼされ鞭打たれました。私たちが愛したものの、神よりの大いなる贈り物として受け取ったものは私たちから取り去られました。だがあの邪悪な人間たち、罪と傲慢に満ち、神を汚した不義なる者たちにはあらゆる事物が満ち溢れています。私たちがこれをもって神に仕えていたあらゆる事物が満ち溢れています。思うに、神に仕えても無意味なのではないでしょうか。」

ほかならぬこの思いがこの詩編の思いである。滅び行き、うなだれる民の思いがこの詩編の思いである。

「アサフ」は、現代聖書学では「エズラと共に捕囚から帰還した者の中の歌い手の集団」（エズ二・四一）と考えられている。しかしアウグスティヌスは「アサフ」を「ユダ

ヤ人の会堂（シユナゴーク）と理解する。そして詩編七二編の表題である「エッサイの子ダビデの讃歌は終わつた。アサフのための詩編」を「ユダヤ人の絶望を示す語」と理解し、この枠組みで本文を解釈して行く。

このような「予型論的・救済史的解釈」は、アウグスティヌスの他の詩編解釈においても一貫している。このような枠組みで詩編を読み解いてゆくことがアウグスティヌスの詩編解釈の根本的姿勢といえるであろう。われわれは、ここに少し長く引用した箇所から、アウグスティヌスが説教という場面で修辭学の様々な技法（対句など）を駆使しつつ、聴衆の魂を動かし、彼らに聖書の語る救済史的枠組みを理解・納得させようとしている様子を窺い知ることができる。

4 聖書以外の文書の参照・使用

アウグスティヌスの『詩編注解』の本文を観察すると、彼が聖書の本文を解釈するためにヨセフスなどの文書を参照している箇所がある。『詩編注解』七三・三には次の文章がある。

わが兄弟たち、どうか想い起こしてほしい。キリストを迫害する者たちが何を語るのを想い起こしてほしい。「もしわれわれが彼をこのままにしておけば、ローマ人がやって来て、われわれの神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」（ヨハ一・四五）。見てほしい、彼らは地上のものを失うことを恐れて天の国を滅ぼしたのだ。では彼らに何が起こったのか。彼らは地上のものをも失った。キリストを殺したその場所で、彼らは殺された。地上のものを失おうとしなかつたため、命の賜物を葬り去った。殺された者たちは地をも失った。そしてそれは彼らがキリストを殺したのと同じ時に起こり、彼らはその時以来、自らがかくも大きな苦難を被つた理由を想い起こされ続けることになった。なぜなら、ユダヤ人の国が滅ぼされたのは彼らが過越祭を祝っていた時であり、何千人もの人々からなる民族の全体がこの祭りを祝おうと集まっていた時だったからである。

ここでアウグスティヌスは紀元七〇年の第一次ユダヤ戦争

のことを、ヨセフス『ユダヤ戦記』六・九・三を参照しつつ語っている。彼によると、第一次ユダヤ戦争でエルサレムが陥落し、ローマの將軍ティトゥスの手に落ちたのは過越祭の時であった。現代聖書学では、ヨハネ福音書が書かれたのは紀元一〇〇年前後と考えられ、ヨハネ一・四八の記述は第一次ユダヤ戦争の歴史的事実を踏まえた上で書かれた、と考えられているが、アウグステイヌスはこの記述を預言の言葉として捉え、ヨセフスの記述の中にこの預言の成就を見ている。

さらにその少し後の箇所では、ポンティウス・ピラトゥスに関するヨセフスの記述を参照している。

彼らは自らの徴しを徴しとして立てました。しかし知ってはいませんでした」（詩編七三・五）。彼らは自らの徴しを携え、それを立てた。自らの軍旗を、鷲の旗を、竜旗を、ローマ軍の徴しを立てた。あるいは初めに神殿に立ててあった彫像をも立てた。⁽¹⁵⁾

ヨセフスの記述によれば、ローマ総督ポンティウス・ピラトゥス（在職二六―三六）は、総督赴任に際して皇帝の肖

像画が描かれているローマ軍旗を夜陰に紛れてエルサレムに持ち込み、ユダヤ人を挑発したが（ヨセフス『ユダヤ戦記』二・一六九―一七四、『ユダヤ古代誌』一八・五五―五九）が、アウグステイヌスはこの記述を詩編七三・五の預言の成就とみなしている。

5 解釈の姿勢——信仰の尺度 *regula fidei*

詩編のみならず、聖書の中には多くの解釈困難な箇所がある。アウグステイヌスは詩編七四・九の解釈に際して解釈の困難性を認め、次の言葉を語る。

そこで「主のみ手には純なる酒の杯があり、調査された酒で満ちています」という語に移ろう。主が私に与えてくださった理解によれば、この語はユダヤ人に与えられた律法、および私たちが「旧約聖書」と呼ぶ古い文書群、重苦しい戒めの書かれた文書群のことを意味している。とはいえ、さらにより解釈があるかもしれない。聖書の曖昧な箇所のひとつの理解のみを与えることは困難である。だが、どのような理解を引き出

すにしても、それは「信仰の尺度」regula fideiに調和するものでなければならぬ。また私たちは、自分たちより優れた解釈者を妬んでもならないし、自分たちの卑小さに卑屈になつてもならない。愛する者たち、私は私たちにそう思われる所を語るが、だからといって私は、さらにすぐれた解釈を語ろうする解釈者たちに対してあなたがたが耳を閉ざすようになってほしくないのだ。¹⁶⁾

ここに引用された箇所直前の箇所、アウグスティヌスは「主のみ手にある調査された酒がどうして純なる酒なのか」、「主のみ手には純なる酒の杯があり」とはいかなる意味か」といった問を提起し、詩編七四・九の解釈の困難さを指摘する。そしてこの箇所で三つのことを述べる。

- 1 解釈者は、解釈困難な箇所に遭遇したとき、自分の解釈を最善と考えるべきではない。
- 2 解釈者は理解困難な箇所を謙虚に認めるべきである。
- 3 いかなる解釈を採用にしても、その解釈は「信仰の尺度」regula fideiに調和するものでなければなら

ない。

ここに語られる「信仰の尺度」regula fideiとは「キリスト教の教え」二・九、一四で「信ずることの尺度」regula credendi、『三位一体論』一・一一・一二で「聖書理解の尺度」regula intellegendarum Scripturarum、『同書』二・一・二で「規範的尺度」canonica regulasと呼ばれるものことである。M.Mellet, Th.Camelotは『三位一体論』二・一・二への註において「信仰の尺度とは信条のことではなく、聖書解釈に際しての教会の伝統のことである」と述べている。¹⁷⁾

6 哲学思想への言及

しばしばアウグスティヌスはキリスト教思想と相容れない哲学思想について言及し、これを論駁しているが、『詩編註解』にもこの態度は現れている。

- 6・1 中期プラトン派に対して
詩編七二・一一には「神が何を知っていよう。いと高き

者に知識などがあるのか」という語があるが、アウグステイヌスはこの語に言及して次のように語る。

「そして彼らは言いました、『神が何を知っている。いと高き者に知識などがあるのか』と」(七二・一一)。見るがよい、彼らがいかなる思いなしを通つて導かれて行くのかを。不義なる者たちは「神は人間界のことに関わらない」と考えて満悦している。だが神は私たちの行いをすべて知っているのだ。あなたがたはここに語られていることを見ている。兄弟たち、お願いしたい。すでにキリスト者となつている私たちはこんな言葉を発してはならないのだ。いわく、「神が何を¹⁸⁾知っている。いと高き者に知識などがあるのか」と。

この表現をみると、アウグステイヌスはこの詩編の一節を中期プラトン派の「神・制作者」の思想を論駁するために用いていることが分かる。中期プラトン派の考えによると、世界の制作者(デーミウルゴス)である神は至高な者であるから物的な人間世界に関わることはなく、低次の存在である様々な霊(デーモン)がこれに関わると考えられて

いた。¹⁹⁾

6・2 エピクロス派に対して

またアウグステイヌスは詩編七三・二二の「主よ、立ち上がってください」について、作者アサフがこのように語るのは、周囲の人々がアサフに向かつて「お前の神はどこにいるのか」(詩編四一・四)と嘲るからであると述べて、次のようにエピクロス派に言及する。

「私を」嘲るのは異邦人やユダヤ人、異端者のみではない。時にはカトリック教徒の兄弟さえもが口をゆがめる。……そして彼は……こう言うこともあるのだ。「誰がこの世によみがえつたのだ」。「俺は親父を墓に入れて以来、親父が墓から語るのを聞いたことなんか²⁰⁾ないぞ」。

——そのような疑い深い信徒に私は何をできようか。私は、彼らが見ていないものを示すことができるだろうか。できはしない。……あるいはこう言う人がいるかもしれない、「私は死後には無になる」と。この人は書物を学んだ。エピクロ

スとかいう狂気の哲学者から、知恵を愛する者「哲学者」というよりは虚無を愛する者からこれを学んだ。

哲学者たちですら彼を「豚」と名づけている。肉体の欲求を最高善と主張し、自己とは肉の泥の中にある意思だと主張する彼を「豚」と名づけている（ホラティウス『書簡』一・四・一六）。その学識ある人はおそらく「私は死後には存在しない」との説をエピクロスから学んだのだろう。²⁰

エピクロスは、周知のごとく、デモクリトスの原子論を受け継ぎ、原子からなる自然界の事物から流出するエイドラ（*Idola*）が、同じ原子からなる魂を刺激することで感覚が生じると説き、死や死後の懲罰の不安と苦しみから人間を解放しようとした。その結果として「われわれが存するとき死は存せず、死が存するときわれわれは存しない」という唯物論的主張が出てくるが、アウグステイヌスは『詩編註解』七三・二五において終始エピクロスの説を念頭に置き、これを論駁しようとしている。

7 信仰者の生に対する倫理的指針

『詩編』七五・一二には「われらの主なる神に誓いを立て、それを果たしなさい」という語がある。アウグステイヌスは『詩編』に時折散見されるこのような語を講解するに際して、聴衆に対して細やかな倫理的指針を与えることを忘れない。

すべての者は自ら可能な誓いを立て、それを果たすべきである。誓いを立てて果たさないようであってはならない。そうではなく、自ら可能な誓いを立てて、それを果たすべきなのだ。……自らの力に頼るとき実現は失敗に終わる。だがあなたが誓いを立てようとする方に頼るのであれば、心安んじて誓いを立てそれを果たせるのだ。

「われらの主なる神に誓いを立て、それを果たしなさい」（同上）。では私たちのすべてが共通に立てるべき誓いがあるのか。それはある。神を信じること、永遠の命の希望を抱くこと、日常生活でよく生きることがそれである。

なぜなら、すべての人間に課せられた共通な規範があるからである。盗んではならない、……姦淫してはならない。……酩酊に溺れてはならない、……傲慢になつてはならない。……人を殺してはならない、兄弟を憎んではならない、他人の破滅を企んではならない。……私たちは皆、これらすべてを誓うべきである。

これらのほかに、個々の者に固有の戒めがある。ある人は結婚の貞操を神に誓い、自らの妻以外に女を知ると誓う。女性も同様に、自らの夫以外に男を知ると誓う。ある人はすでに夫婦間の性交渉を経験していながら、これ以上それを経験すまい、そのような欲情を抱くまい、続けるまいと誓う。そしてこの誓いは他の誓いよりも良いものである。ある者は若年の頃より自らの純潔を誓い、他の者たちが経験し続けていることを経験すまいとする。この者たちはさらに高い誓いを立てたことになる。ある者は自らの家をやつてくるすべての聖徒たちのもてなし所とするという大きな誓いを立てる。ある者は自らの財産を貧民に施すためのものにし、共同生活に入り、聖徒の交わりの中に入ろうとの大きな誓いを立てる。

神に誓ったのちに後ろを振り返るのはよくない。……⁽²⁾

この後、アウグスティヌスは様々な具体的な状況を取り上げて「誓い」についての細々とした指示を与える。そして結論として

詩篇が語ったのは「誓うな」ということではない。そうではなく「誓い、果たせ」ということなのだ。

という語をもつて一連の訓戒を締めくくるのである。⁽²⁾

8 まとめ

以上われわれは、『詩編註解』第七〇編から七四編に見られるアウグスティヌスの詩編解釈の具体的方法を見てきた。ここから分かるのは次の諸点である。

- 1 アウグスティヌスは文献学者である。―彼の詩編の本文を扱う方法は、現代の文献学者がテキストを扱う方法にも通じるものがあり、きわめて実証的・合

理的である。

2 アウグステイヌスは修辭学者である。―彼は、実証的方法を用いて導きだした解釈を、説教の場面では、修辭学の様々な技法を駆使して、聴衆の魂を動かす語り方で語っている。われわれは、『詩編注解』七二・四―五の引用にこのことの実例を見ることができる。

3 聖書以外の文献に開かれた態度―彼は聖書の預言の成就などを説明するために、ヨセフスなど聖書以外の文献を積極的に用いている。また異教徒ホラティウスのエピクロス批判なども積極的に取り入れている。

4 キリスト教思想を哲学思想との対比で捉えていること―彼は中期プラトン派やエピクロスなど、思想としてのキリスト教と相容れない哲学思想を明確な形で批判する。

5 信徒の日常生活への配慮―彼は、たとえば「誓い」についての訓戒から分かるように、信徒の日常生活に対する細やかな配慮を忘れない。この意味で、アウグステイヌスは司教である。

6 予型論的・救済史的聖書理解―そしてこのような彼の聖書解釈を根本から支える枠組みが「旧約聖書を新約聖書の予型として捉える」という救済史的聖書理解であつた。

これらの諸点は彼の聖書解釈の全体を網羅しているとは言えないかもしれない。だが彼の聖書解釈の幾つかの重要な側面を示しているとは言えるのではなからうか。

(明治学院大学名誉教授)

註

(1) 本稿は、二〇一六年三月一九日に東京大学駒場キャンパスで行われた教父研究会第一五五回例会での発表を基にしたものである。発表では本稿の内容に加えて、詩編注解第七〇編の説教を通覧したが、誌面の制約からこの部分については割愛させていただく。また本稿の内容上、どうしても著作本文の引用が多くなることをご容赦いただきたい。

- (2) *Emn. in Ps.*, 71.1.
- (3) *Emn. in Ps.*, 73.1, *Asaph latine Congregatio, graece Synagoga dicitur.*
- (4) *Emn. in Ps.*, 70, *serm. 1.2, Titulus ergo est psalmi huius, ... titulus indicans in limine quid agatur in domo.*
- (5) 三七四年、学業を終えたアウグスティヌスはタガステに戻り、文法学を教えた。
- (6) *De ord.*, 2.12.36.
- (7) *Emn. in Ps.*, 71.2.
- (8) *loc. cit.*
- (9) *Emn. in Ps.*, 71.6.
- (10) *Emn. in Ps.*, 71.8.
- (11) 前置詞と前置品詞は元来副詞であり、ギリシア語やラテン語では前置詞が副詞的要素を多分に残しているのだから、このような読み替えが可能になる。
- (12) *Emn. in Ps.*, 71.8.
- (13) 筆者が「比喩的聖書解釈」という語において念頭においているのは、狭義のアレゴリア的解釈、たとえばアレクサンドリアのフィロンの比喩的聖書解釈である。しばしばフィロンは、議論の冒頭に特定の聖書の箇所などを引用し、その後数十頁にもわたって全く別の議論をしているように装いながらその引用箇所の解釈を——密かに——行い、最後に冒頭に引用した聖書の箇所と類似の箇所を

- 示すことによって結論を導き出すことがある。つまり「ひたひたのことを語りつつ別のことがらを語る」(「リアルコリア」)のである。水落健治「アレクサンドリアのフィロンにおける《聖書解釈》の問題——Jacques Cazeaux: *Philon d'Alexandrie, l'exegète* をめぐって」『途上』第一五号、一六三—一七八頁、一九八五年、思想とキリスト教研究会を参照。
- (14) 以下、*Emn. in Ps.*, 72.4.5.
- (15) *Emn. in Ps.*, 73.8.
- (16) *Emn. in Ps.*, 74.12.
- (17) *Bibliothèque augustinienne vol. 15, La Trinité (livres I-VII)*, p. 577. *La regula fidei, regula canonica*, n'est pas ici proprement le symbole (cf. *Enchir.* 56), mais la tradition de l'Église dans sa façon d'interpréter l'Écriture.
- (18) *Emn. in Ps.*, 72.17.
- (19) このような中期プラトン派に対する批判は、すでにユスティノスにある。Aug. はこの批判を教会の伝統の中で受け取ったのかもしれない。水落健治「ギリシア哲学とキリスト教との出会い——ユスティノス「ユダヤ人トリュフォンとの対話」序文を読む」、『理想』第六八三号、八頁を参照。
- (20) *Emn. in Ps.*, 73.25.
- (21) *Emn. in Ps.*, 75.16.

(22)

本文では触れられなかったが、Aug. はこの他にも信仰者の生に対する倫理的指針を与えている。『詩編注解』七二・二六では「金持ち」に対する倫理的指針が、『同』七〇、説教一・一七一―一八では職業と信仰の問題が、商人の実例をもって論じられている。